

屋台ばやしとししまい

ぼくは、今年、地いきのお祭り「深谷小前田屋台まつり」の屋台ばやしの練習にさんかするつもりです。三台の屋台がねり歩くお祭りで、百五十年近くのれきしがあります。お祭りは、秋に行われます。地いきの人は、昔から、その年の作物のできぐあいや地いきの身近な話題などを話し合うことのできるお祭りをとても楽しみにしてきました。そして、今も、毎年楽しみにしています。そこで、ぼくは、これまでお祭りは見に行くだけでしたが、今年は屋台にのつてみたいと

おもいます。

ぼくは、去年、はるとくんに、「いっしょに屋台ばやしの練習にさんかしようよ。」

と、さそわれました。でも、ぼくは練習がめんどうだともいことわってしまいま



した。五月から始まる練習は、最初は二週間に一回ほどですが、十月の祭りが近づくと毎日になります。学校の宿題もあるし、暑い日にも練習に行かなくてはならないのがいやだったからです。

でも、今年はちがいます。ゴールデンウィークに行った渋谷栄一記念館で聞いた話がきっかけとなり、練習にさんかしようと思ったのです。

渋谷栄一記念館には、漢字で書かれた本や、昔の写真がたくさんありました。その中でぼくの目をひいたのは、三つの

古いししがしらでした。

「これはなんですか。」

と、記念館のかたに聞くと、

「これは『ししまい』で使うものですよ。」

栄一翁が生まれた地いきのお祭りで使われていたものなのですよ。」

と、せつ明をしてくださいました。

栄一翁の生まれた地いきでは秋祭りが行われ、栄一翁は、とくにししまいを見るのが好きだったそうです。子どものころにはししまいの練習をし



〔渋谷栄一記念館所蔵〕

て、お祭りではししがしらをかぶって役者としておどっていたそうです。今もつづいているお祭りで、子どもがおどったあとには、地いきの人たちから大きな拍手がおきます。きつと栄一翁もたくさん拍手をもらい、とてもすがすがしいきもちになったことでしょう。

大人になって、東京に住んでいた栄一翁は、年のはじめに秋祭りの日にかくにんして、仕事の予定を空けて、ししまいを見るために帰ってきていたそうです。地いきの人たちも、栄一翁が帰ってくるということ、ししまいを見やすい席を

用意して待っていたそうです。自分がさんかしていた祭り、自分が生まれ育った地いきで行われる祭りをほこりに思い、祭りが受けつがれてくれていることをよろこび、え顔で見えていたそうです。

「栄一翁は、自分の生まれこきょうのことがすきで、本当に大切に思っていたのですよ。」

ぼくも栄一翁に負けな

いくらい自分の生まれたところがすきです。けれども、屋台ばやしの練習がめん



〔渋沢史料館所蔵〕

どうだと思っていたほうが、栄一翁みたいに大人になってからも地いきのことを大切にできるのかな、と考えました。

てくれると思います。

今年は、ぼくからはるとくんを、

「屋台ばやしの練習にさんかしよう。」

と、さそってみようと思います。そして、

じょうずになっ

て、地いきの

人たちを喜ばせ

たいと思います。

きつと栄一翁も

空から見て、大

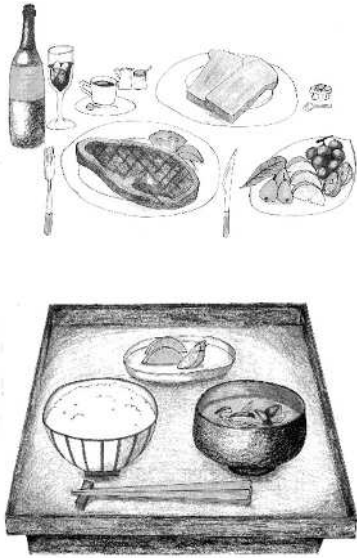
きな拍手を送っ



令和二年三月 渋沢栄一翁ごころざし読本編集協力委員会作成

はじめてのコーヒー

みなさんの学校のきゅう食^{しよく}には、どんなメニューがありますか。ごはん、パン、ラーメンなど、和食^{わしよく}や洋食^{ようしよく}、中国^{ちゆうごく}の料理^{りようり}など、バラエティーに富^とんでいますよね。頭^{あたま}はチョンマゲ、こしには刀^{かたな}を差^さしていた時代^{じだい}には、もちろん和食しかありませんでした。渋沢栄一翁^{しぶさわえいいちおう}のわかいころのお話^{はなし}です。



栄一^{さ い}が二十七才^{さ い}のとき、フランスのパリで開^{ひら}かれる万国博覧会^{ばんこくはくらんかい}に徳川慶喜将軍^{とくがわよしのぶしやうぐん}の弟^{おとうと}、昭武さま^{あきたけ}が出席^{しゅつせき}することになりました。そのおともに、思^{おも}いやりがあつてお金の管理^{か ね かん り}も上手^{じやうず}な栄一^{さ い}がえられました。



横浜よこはまのみなとからフランス船せんアルフエ号ごうにのりこみました。栄一えいいちにとって、はじめての海外かいがいへの旅です。船ふねの中なかでも、はじめてのことばかりで、おどろきの連続れんぞくでした。食事しょくじについて栄一は、日記にっきにこう書いています。

「毎朝まいあさ七時じごろ、テーブルで茶ちやをのみます。茶にはかならずさとうを入れ、パンやおかし、ぶたの塩しおづけ（ベーコン）などがそえられます。パンにはブルー（バター）という、牛うしの乳ちちのかたまったものをぬって食たべます。

十時じゅうじごろになると、朝食ちやうしょくがはじまります。はしではなくスプーン、フォー



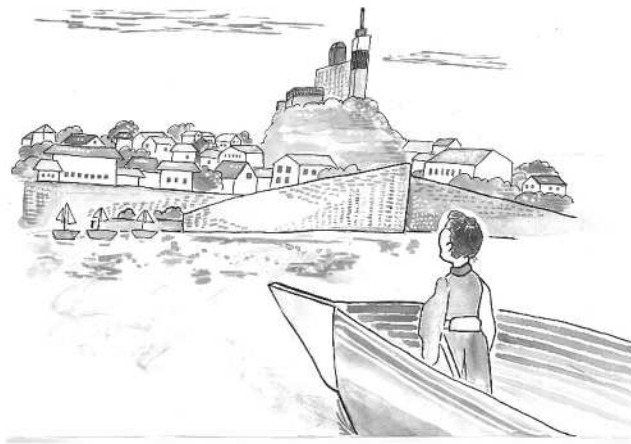
ク、ナイフをつかいます。おかし、ミカン、ブドウ、ナシ、ビワなどがおぼんにならびます。鳥とりや豚ぶた、牛うし、羊ひつじ、いろいろな種類しゅるいの肉を、やいたり、むしたりしておかれます。その中からすきなものを食べてよいのです。ぶどう酒しゅ

は氷を入れてのみます。パンも二、三まい食べます。食後には、コーヒーにさとうと牛にゆうを入れてのみます。これはとてもむねの中をさわやかにします。」

みんなは、黒っぽいコーヒーなど、はじめの食べ物をなかなか口にできせん。そんな中、栄一は、はじめて見る食事にもきょうみをもち、出されたものなんでも食べたのです。

栄一は、ご飯とみそしる、おしんこの食事が中心で、いそがしく食べる日本にくらべ、ながい時間をかけてゆっくり食事をするようすにもおどろきました。

ヨーロッパに向かう船の中だけでも、新しいものをたくさん目にした栄一。ヨーロッパの地におり立ち、外国の様子をいろいろ見て回る栄一は、どんなことを考えたでしょうか。



令和二年三月 渋沢栄一翁ころざし読本編集協力委員会作成

友情の人形（フレンドシップドール）

ギューリック三世は、八基小学校の体育館で、お話をされました。

「私は、スーザンちゃんに会えてうれし
いです。スーザンちゃんは皆さんとこ
こに一緒にいることが大好きなよう
ですね。」

スーザンちゃんは、
二〇一六年に、ギュー
リック三世からおく
れた人形です。ギュー
リック三世は、スーザ
ンちゃんに会いに来
たのです。



令和元年5月27日
ギューリック三世夫妻 八基小学校

ギューリック三世の祖父、ギューリッ
ク博士は、これから日本とアメリカが
ずっと仲良しでいられるように、日本の
子どもたちに人形をおくることにしまし
た。ギューリック博士は、だれにたのん
だらよいか考え、渋沢栄一にお願いする
ことにしました。

「国と国が、ずっと仲良くするためには、
子どもたちがどうしが仲良くすることが
大切です。そこで、日本とアメリカの
子どもたちが仲良くしていけるように、
人形をおくろうと思います。」

その時、栄一は、とまどいました。

なぜなら、少し前に、関東で大きな地震が起きたとき、アメリカからたくさんのお金や食べ物、洋服などを送ってもらいましたが、そのお礼がまだすんでいなかったからです。そこで、栄一は、人形はいただけないと、ことわりしました。



すると、ギューリック博士は、「お礼なんていりません。日本の子どもたちがよろこんでくれば、アメリカの子どもたちもよろこびます。それで子どもたちが仲良くできればよいので

す。日本には、ひな祭りという大切な行事があります。その三月三日までにとどくようにします。」と言いました。

栄一は、ここまで子ども同士のつながりの大切さを考えているギューリック博士の思いに、心が温かくなりました。



栄一は、外務省や文部省、会社の人たちといっしょに、人形を、日本の子どもたちにわたせるよう、受け入れのじゅんびをすすめました。

そのころ、アメリカでは、日本となかよくしなくてもよいという考えが少しずつ大きくなっていたのです。ギューリツク博士は、アメリカでたくさんの人に協力してもらえよう、一生懸命お願いに回っていました。

国をこえた、二人の思いはかない、一万二千体ほどの人形が日本にとどき、日本中の学校へおくられました。そして、日本からのおかえしとして、栄一たちは日本人形をおくったのでした。

その後、戦争のえいきょうもあり、今は全国で三〇〇体ほどしか残っていません。

そこで、ギューリツク三世は、祖父である博士の考えを引き継ぎ、全国に新しく友情の人形（フレンドシップドール）をおくっているのです。

ギューリツク三世は、最後にこうおっしゃいました。

「私は、このフレンドシップドールが、友情、平和のメッセージをいつまでも伝え続けることを望みます。」



令和二年三月 渋沢栄一翁ごころざし読本編集協力委員会作成

父の教え

栄一翁の家は、大きな農家でした。お父さんは、仕事や学問にとってもねっ心な人で、小さいころから本を読むことなどを教えていました。

栄一翁にとってお父さんは、とても大きくかんじられました。

栄一が子どものころのことです。しんせきのおじさんといっしょに、江戸（今の東京）に出かけました。

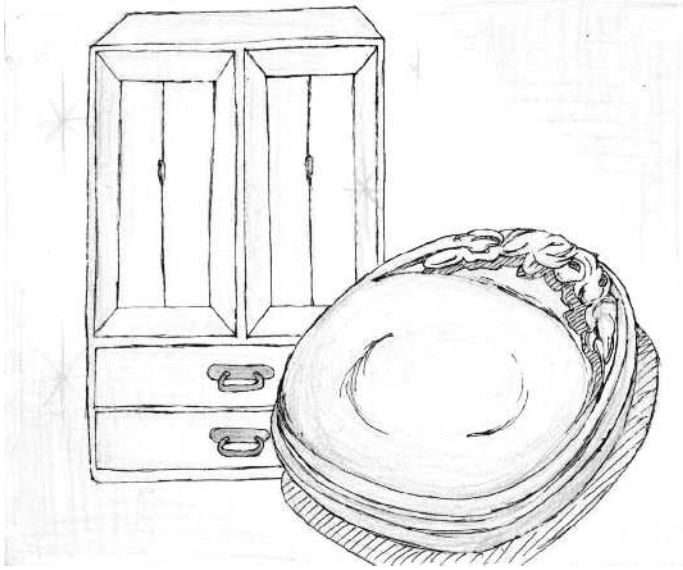
江戸の町には、栄一にとってきょうみをひくものがたくさんありました。



中でも、桐で作られた本ばこと、美しいものほられたすずりは、とても気に入りました。

勉強好きの栄一は、本ばこもすずりも持っていました。その品物をひとめ見

るなり、ほしくてたまらなくなりました。
（ねだんは少し高いけれど、これなら持つてきたこづかいで買える・・・。）栄一は思い切って、その本ばことすずりを買いました。



ほしい物を手に入れ、栄一は大まんぞくで家に帰りました。

栄一は、家に帰るとさっそくお父さんに、買ってきた本ばことすずりを見せました。お父さんは、それを見るなりともおこつて言いました。

「栄一、なぜこんなものを買ってきた。」

「えっ・・・。」

「わかいうちからこんなぜいたくをしていたら、お金がいくらあっても足りない。この親父こうものめが！」

栄一は、（なぜ、しからなければならぬのだらう・・・。）と、思いました。

お父さんは、

「おまえは本当^{ほんとう}にひつようなものを買ったのか。ぜいたくは、いけない。人間^{にんげん}のよくは、きりがないのだ。」

と、きびしいことばをつづけました。

「栄一、よく考え^{かんが}なさい。」

その夜、栄一は、お父さんの言ったことばを思い出しながら、今日のことについて、もう一度^{いちど}考えてみました。



令和二年三月 渋沢栄一翁ころざし読本編集協力委員会改訂



藍より青く
あいのよりあお

上柴西小学校の藍葉

栄一えいいちの家はあい玉だま作りをしていました。
「藍」というしよく物の葉を買って、あい玉というせんりょうにして売る仕事です。
お父さんは、あいの葉のよい悪いを見分けるのがじょうずでした。そして、栄一もよくお父さんの手伝いをして、あいの葉を買いに行き、あいの葉のよい悪いを見わける勉強をしていました。

あるとき、お父さんにほかの用事ができたので、おじいさんと栄一の二人で、あいの葉を買いに行かなければならなくなりました。

栄一は、
「自分一人で行かせてください。」

と、おじいさんにたのみました。

「なぜ、じいといっしょに行かないのだ。」

「自分でどれだけうまく買えるか、自分の力を^{ちから}ためしてみたいのです。」

栄一は、だれの手助け^{てだす}もなしで、あいの葉を買えるところを見せて、一人前である、みとめてもらいたかったのです。

おじいさんは、うで組みをしてしばらく考えたあと、こう言いました。

「よし、わかった。栄一にまかせよう。」



栄一は、自信^{じしん}をもって出かけました。

しかし、栄一はまだ子どもです。見た目も子どものかみがたでしたので、農家^{のうか}の大人は相手^{あいて}にしてくれません。

「わたしにも、あいの葉を見せてくれませんか。」

「じょうだんはよせ。おまえみたいな子どもに見せたってわかるはずがないだろ。」
「そんな……。」

ほかの農家の人に聞いても、返事は同じです。（やっぱり、わたし一人ではだめなのかな・・・）だれにも相手にしてもらえず、しばらくその場にしゃがみこんでいました。

しかし、（これではいけない！）と、もう一度氣力をふりしぼって、あきらめずに、たずねてまわることにしました。

何けんも何けんも声をかけ続け、とうとう、お父さんと知り合いの農家の人に、話を聞いてもらえることになりました。

栄一は、あいの葉をゆっくり見ると、お父さんのそばで学んできたことを生かして、自分の考えを言ってみました。

「この葉っぱは、少しすこひりょうが足りないのではないですか。」

「これは、少し水が足りないですね。」

「これは、青々あおあおとしていて、とてもよい葉ですね。」

栄一の言葉ことばを聞いて、まわりの大人たちは、みんな、おどろいてしまいました。栄一の言うことは、どれも正ただしかったからです。

「若いわかが見る目があるのう。よし、おまえを信用しんようして、売ってやろう。」

「将来しょうらい、大きな人物じんぶつになるかもしれないな。」

栄一は、やっとえがおになり、おねをはって家へ帰りました。



備前堀^{びぜんぼり}

学校^{がっこう}からの帰り道^{かえみち}、仲良^{なかよ}しのゆうたが、
「明日^{あした}、備前堀にザリガニつりに行^いこう
よ。」

と、言^いいました。

「うん。行^いこう。いっぱいザリガニつろ
うね。」



ぼくは、ゆうたとザリガニつりに行く
やくそくをしました。

家^{いえ}に帰^{かえ}って、わくわくしながら、明日
のザリガニつりのじゅんびをしました。

ところがつぎの日^ひは、朝^{あさ}から雨^{あめ}がふつ
ていました。お母^{かあ}さんが、

「今朝^{けさ}、備前堀の近^{ちか}くを通^{とお}ったら、水^{みづ}が
茶色^{ちやいろ}くにゴって、今^{いま}にもあふれ出^で
そうだったわ。あぶないから、今日は
あそびに行^いかないでね。」

と、言^いいました。



学校に行くと、ゆうたは、
「ザリガニつり楽し^{たの}みだね。雨上がりは
いっばいつれるよ。三^{さん}時に備前堀に
しゅうごう。やくそくだよ。」
と、言^はつて、走^{はし}つて帰^{かえ}つてしまいました。

外^{そと}に出^でると雨があがっていました。
ぼくは、（どうしよう・・・）と思^{おも}いな
がら、一^{ひと}人、歩^{ある}いて帰^{かえ}りました。

「ただいま。」

「おかえり、あさひ。なんだか元^{げん}気がな
いな。どうしたんだ。」

おじいちゃんに、ゆうたとやくそくし
たザリガニつりのこと^{こと}を話^{はな}しました。

「そうだね。たしかに雨はもうあがって
いるね。どうしたらいいかなあ・・・。
まようところだねえ・・・。そういえ
ば、備前堀にザリガニつりに行くんだ

よね。あの備前堀は、ちがう場所に作
りかえられる計画があつたんだよ。そ
の計画を中止するように国にうったえ
た人が、尾高惇忠だよ。水がなくて
作物が育たず、こまってしまう人たち
がたくさんでてしまうことを考えたか
らだよ。惇忠も、いろいろとなやんだ
と思うよ。」

「そのあと、どうなったの？」

「今までの堀を修理して、そのままつか
えるようにしたんだよ。惇忠は、自分
が正しいと思うことを進んで行く人
だったんだよ。」

ぼくは、おじいちゃんの話聞きなが

ら、ゆうたの顔を思い出していました。



令和二年三月 渋沢栄一翁ごころざし読本編集協力委員会改訂

働^{はたら}く^{にら} 塙^{づか}直次郎^{なおじろう}

「外国^{がいこく}にあるようなすばらしい工場^{こうじょう}をつくれないか。」

直次郎^{なおじろう}は惇忠^{じゆんちゆう}にたのまれました。

新しい工場^{あたらしいこうじょう}をつくるためには、直次郎^{なおじろう}が今まで見てきた日本^{にっぽん}の工場^{こうじょう}とはちがひ、たくさんのレンガ^{ひつよう}が必要です。直次郎^{なおじろう}はレンガ^{レンガ}というものを見たこともないし、もちろん、つくったことはありません。

直次郎^{なおじろう}はなやんでしまいました。

工場^{こうじょう}の完成^{かんせい}まで時間^{じかん}がなく、レンガ^{レンガ}を外国^{がいこく}から買うお金^{かね}もないのです。直次郎^{なおじろう}

は考え^{かんが}ました。（かわらのぎじゆつをいかせば、きっとレンガ^{レンガ}をつくれるはずだ。いつもいつしよに仕事^{しごと}をしている深谷^{ふかや}のかわら職人^{しよくにん}たちに働^{はたら}いてもらおう。）

直次郎^{なおじろう}は、深谷^{ふかや}のかわら職人^{しよくにん}に協力^{きようりよく}をお願い^{ねが}しました。そして、みんなで富岡^{とみおか}へ向^むかいました。

こうして、直次郎^{なおじろう}はレンガ^{レンガ}づくりに挑^{ちよう}戦^{せん}することになりました。

しかし、そうかんたんにはいきません。失敗^{しっぱい}ばかりが続^{つづ}きました。



そんなとき、直次郎は、（工場の完成を、みんながまっている。あきらめるわけにはいかないぞ。）と思うのでした。

その度（たび）に、またがんばる気持ち（きもち）がわいてきて、なかまとはげまし合（あ）い、くり返（かえ）

しくり返（かえ）し取り組みました。

そして、ついに、レンガづくり（せいこう）に成功（せいこう）しました。そのレンガ（つか）を使って、富岡製（とみおかせい）糸場（しじょう）はりっぱに完成したのです。直次郎は、つれていったなかまとともに仕事（しごと）ができたことを、しみじみよろこびあいました。

富岡製糸場（とみおかせいじょう）が完成したあと、直次郎は工場（こうじょう）で働（はたら）くなかまをさがしに出（い）かけました。このころは、近代（きんだい）的な工場（こうじょう）で指導（しど）を受けられる仕事（しごと）はめずらしく、働（はたら）きたい人がたくさん集（あつ）まりました。



（こんなにも集まってくれたのか。でも
たくさん集まりすぎて、このままでは働
けない人がでてしまう。）

みんなのことを考えると、直次郎はむ
ねが痛くなりました。（この人たちのた

めに、わたしに何かできることはないだ
ろうか……。よし、新しい工場を作ろ
う。そうすればみんなが働けるはずだ。）
直次郎は、富岡製糸場のそばに埴塚製糸
場をつくりました。そのおかげで、たく
さんの人たちが、この工場で品質の良い
糸を作ることができました。

直次郎のおかげで、多くの人働くこ
とができたのです。

令和二年三月 渋沢栄一翁ごころざし読本編集協力委員会改訂



「諏訪神社」での獅子舞を見る渋沢栄一翁[渋沢史料館所蔵]

血洗島の諏訪神社の獅子舞

※「屋台ばやしとししまい」関係

渋沢栄一は、二十四歳で血洗島を離れても、ふるさとへの思いを忘れることはありませんでした。中でも、秋祭りの獅子舞を見るのが大好きでした。年の初めには、必ず秋祭りの日を確認し、予定を空けておくように指示していたそうです。栄一は、「夜おそくまで熱中して獅子舞を楽しむことができます。結局のところ少年時代の心に帰るからなのでしょう。」と話しています。また、泳いだことや相撲を取ったことなどを思い起こし、「さいなことまで興味がつきません。」とも話しています。血洗島は、いつの日も栄一の心のふるさとだったのでしょう。



「わたしたちの深谷」 深谷市教育委員会より

※「屋台ばやしとししまい」 関係
 小前田の諏訪神社の祭屋台

小前田上町・中町・本町には、明治のはじめころに建てられた三台の屋台が保存されています。諏訪神社の祭りでは笛、鐘、太鼓の屋台ばやしにぎやかです。祭りの時、昼間は、国道一四〇号線で屋台がひきまわされ、夜は屋台を舞台にして歌舞伎が上演されました。たくさんのお店が出て、多くの人が、この祭りに来て、楽しんだということです。屋台は、どれも櫓、杉、檜、銀杏の木が使われ、豪華なつくりになっています。

現在も祭りの時には、国道一四〇号線でひきまわしがされています。祭りではない時は、「道の駅はなぞの」で展示されています。



渋沢栄一の国際交流

※「はじめてのコーヒー」関係

フランス到着数カ月後の栄一　　フランス到着直後の栄一
[渋沢史料館所蔵]

渋沢栄一が初めて外国にわたったのは、日本が「武士の時代」だった慶応三（一八六七）年です。

ヨーロッパに向かう船「アルフエ号」の中で、日本の文化とは違う文化に触れることができました。中でも「食事」は日本とは大きく異なりました。当時の日本の食事は、食器を入れている箱をテーブルの代わりにし、白米とみそ汁、漬物を食べていました。そんな生活の中で見た豊富な食材を使うヨーロッパの料理は、栄一に強い衝撃を与えたはずです。

一年余りのヨーロッパの生活で、栄一は進んだ技術や文化に驚き「日本は外国のよいところをもっと取り入れなくてはならない」と考えるようになったのです。



渋沢栄一記念館を見学する
ギューリック三世夫妻
(令和元年5月27日)



青い目の人形を手にする渋沢栄一

[渋沢史料館所蔵]

※「友情の人形」関係
渋沢栄一とアメリカから来た「青い目の人形」

今から九十年以上も前、日本とアメリカの関係が悪くなったことがありました。そこで、以前日本に住んでいたギューリック氏は、アメリカと日本の関係を心配し、子ども頃からお互いの国を知ることが将来につながると考え、日本の子どもたちに一万二千体の青い目の人形をおくりました。

日本では、渋沢栄一が人形の受け入れを進め、お礼として日本人形五十八体をアメリカにおくりました。埼玉県では、現在十二体の人形が確認されています。

令和元年五月、ギューリック氏の孫であるギューリック三世が自ら八基小におくった人形に会いに来ました。日本とアメリカの親交は今もなお続いているのです。